

■湯朝竹山人(観明)
ゆあさちくさんじん
初の民間工場1875=

小唄に生きがいを見出し、その研究家になって、特殊な業績を遺した畸人。

瀬戸内海東部の家島で、浄土真宗住職湯朝鐵龍の子に生まれる。名は觀明。姓は湯浅とも書く。

未だ文字を解しない幼時から、夕餉の晩課に詩吟を鼓吹され、「唐詩選」の朗誦が趣味になって行く。
明治14年政変1881= 6歳：

秩父事件・・1884= 9歳：

帝国憲法発布1889=14歳：

大本教・・・1892=17歳：この年、黒岩涙香が「万朝報」を創刊、有力な大衆言論紙になって行く。

郡司千島探検1893=**18歳**：

日清戦争始・1894=19歳：

僧侶になることを嫌って郷里を出、横浜の「毎朝新聞」の記者や、東京の「やまと新聞」主幹福地桜痴の黒子をやるうち、黒岩涙香邸の食客となり、

八幡製鉄始・1897=22歳：この頃、「万朝報」の社主兼主筆黒岩涙香の秘書となり、新刊図書雑誌紹介係も兼ね、同欄を権威あるものとしていた批評主任緒形流水の薰陶を受けるとともに、自らも執筆するうち、出版界に通じ、多くの知己を得、同紙の懸賞小説応募原稿審査にあたって、のちの一流作家を生み出すも生涯語らず、

教科書疑獄・1902=**27歳**：

日比谷公園・1903=28歳：処女作「人間論」を出版して、有名川柳家が「日本」に「天人論(涙香)の居候人間論も書き」と評句、

日露戦争終・1905=30歳：以降、「理想の家庭」「百字文百人評」。涙香が、和歌に並ぶ古来の詩形たる俚謡(七七七五で、関東では都々逸、関西ではよしこ)が堕落していたのを改めるべく「俚謡正調」欄を創始すると、読者から感激的共鳴をもって迎えられたのと同様、自らも刺激され、涙香を接けて選者にあたるうち、広く一般歌謡に心を寄せるようになり、知己となつた歌謡研究家のために、出版を斡旋するなど尽力して行くようになる。

満鉄発足・・1906=31歳：「結婚論」を書くも、自らは良縁を得ず、生涯独身、自ら家を構えることもなく、片瀬の学者の別荘番や本郷で石川詩仙洞と同居するなどし、同好から招かれて地方吟遊の旅に出、各地の美酒に酔うことを無上の愉しみとするようになる。

大逆事件判決1911=**36歳**：

明治天皇没・1912=37歳：

大正政変・・1913=38歳：「通人物語趣味の東京」「記者生活硬派軟派」を本名で出版する間、「俚謡」、

21ヶ条要求・1915=40歳：「禅房の一年間」。*「諸国俚謡傑作集」出版後は、端唄・小唄などの三味線小歌曲や民謡の研究に従事し、「小唄の竹山人」になって、

民本主義・・1916=41歳：「小唄撰」、

大暴落・・・1920=**45歳**：「趣味の小唄」、

原敬首相暗殺1921=46歳：

関東大震災・1923=48歳：大震災で丸裸になり、

護憲三派压勝1924=49歳：「小唄夜話」、

円本時代始・1926=51歳：「小唄漫考」「小唄研究」と、次々出版、知友も得て大家のように見られるようになるも、物質的には全く恵まれず、零落した隠居といった体で、小唄に遊ぶことによって、浮世の苦しみを忘れるようであった。

金融恐慌・・1927=52歳：「浮れ草」までの4冊を出版したアルス社主人北原鉄雄(白秋の弟)や、長谷川伸の援助を受け続けて生活、

世界恐慌・・1929=**54歳**：

満州事変・・1931=56歳：「歌謡襍稿」、

帝人疑獄事件1934=59歳：「隨筆集「杯洗の雫」は、冒頭の「小曲諸派の展望」で、自らにしか書けない専門的なことを詳述、面目躍如たるものになっている。

日中戦争始・1937=62歳：

健保+総動員 1938=**63歳**：

晩年は漢詩に没頭し、詩友であった上野の寛永寺山主の世話を凌雲院に寓居していたが、

日米開戦・・1941=66歳：

戦時下の不自由な生活のためか、栄養失調が老衰を早めたものか、

年金+総武装 1944=69歳：「おたふく風邪の診断を受けて入院し、すぐに、没した。大僧正によって、竹山院釋觀明と追号された。